



## 記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 第3回定例研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

## 巻頭言

### 温故知「識（しん）」

久保 正秋（東海大学）

今回の「会報」はVol. 18(4)ということであるから、その始まりから18年が経過したことになる。初代の会報担当は京都教育大学の林英彰先生で、1997-98年担当。なんと20世紀の出来事である。当初、「会報」の良いネーミングはないかと皆で考えたが思い浮かばず、取りあえず「会報」で行くことになり、18年が経過してしまった。2代目の会報担当が久保である。年4回の会報編集、また当時は郵送であったため、その作業が大変であり、「会報」から早く「解放」されたい、などと戯言を口にしながら編集していたことを思い出す。この初期の頃の「会報」については、2010年2月発行のVol. 13(4)『「巻頭言」という巻頭言」という題目の「巻頭言」（久保）に詳細に記されている。

実は、体育哲学専門領域（旧体育原理専門分科会）の運営委員会が設立されたのも18年前である。当時の会長は石川旦先生、副会長が会田勝先生（大橋道雄先生の恩師）であった。初代の運営委員長が佐藤臣彦先生、代行が大橋道雄先生である。運営委員長はその後、大橋、久保、服部豊示先生と引き継がれ、現在の深澤浩洋先生で5代目となる。その間に「体育原理専門分科会」は「体育哲学専門分科会」と名称を変え、現在は「体育哲学専門領域」と称している。この「原理」から「哲学」への名称変更は本専門領域の一大事件であった。

2005年6月、「体育原理」は「体育哲学」と名称を変えた。2007年5月発行の「会報」Vol. 11(1)は、『「体育」を『哲学』するということ』という当時、運営委員長であった久保の「巻頭言」で始まる。その中で久保は、『「原理」と称していた頃は何かの宗教的な団体と間違われたこともあった』と言いつつ、「哲学」と名乗ることの気恥ずかしさを述べている。このように「哲学」と名乗る事への躊躇いは当時、大きいものであった。名称変更を決める会議では、様々な意見が出された。「哲学と名乗ることで会員が減少するのではないか」「多くの大学で開講されている『体育原理』という授業科目はどうするのか」「体育原論ではだめなのか」等々。それから10年、今、「哲学」と名乗ることに戸惑いは見られない。当たり前のように自らの研究領域を「哲学」と呼び、それに伴い研究の質も確実に向上している。この名称変更は、当時の会長、佐藤臣彦先生の大英断ということができる。

もうひとつの一大事件が夏期合宿研究会の会場変更である。2000年7月、長年にわたり利用していた箱根の「太陽山荘」から現在の「静雲荘」に変更になった。画策したのは「青雲（静

雲)の志」を抱いた5人衆(写真:一人は撮影者)である。背景の富士の雄姿が将来を暗示しているように思えた。しかし、それによって「雲上人」は消えた。「雲上人」とは、「太陽山荘」の最上階3階の部屋で寝起きしていた高名な先生方のことである。その部屋には独特の雰囲気があり、我々は3階への階段を上ることすら躊躇したものである。宴会の余興で柔道の達人の「雲上人」に投げられた若手もいた。門限を破り、「雲上人」から正座で説教を受けた若手たちもいた(その中のひとりには後に会長となったと伝えられる)。若手(当時)で唯一「雲上人」となったことがあるのが佐藤臣彦先生である。さすがの佐藤先生もその時は、度々下界に降りてきて我々と語っていた。今、「静雲荘」には「雲上人」はいない。「雲上人」と呼ばれてもよい年齢となった当時の若手は、単なる「飲み部屋の住人」と化してしまった。しかしながら、若手(現在)と「雲上人になれなかった人々」との距離は、「太陽山荘」時代よりも遙かに近くなった。かつての「話ができない」ほどの関係は解消されたのではないだろうか(酔っ払って、「話にならない」ひとがいる)。



この夏期合宿研究会の会場変更は、21世紀の始まりに相応しい出来事であったと振り返ることができる。

そして今、大きな動きが起ころうとしている。「日本体育・スポーツ哲学学会」とのジョイントである。この18年を振り返っても、そのターニングポイントには、自らの研究領域に夢と希望、そして志をもった人々がいた。今回の大きな変動も「体育哲学」の新たな発展へと繋がっていくと、兼ねて言うものである。

「讖(しん)」: 予言。予言の記録。未来記。

「兼ねる」: 現在のみならず将来のことを考える。予言する。予想する。

[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

久保 正秋 (kubo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp)

## 体育哲学考

## 現場の安全第一

加藤敏弘(茨城大学)

さまざまな分野で「現場」という言葉が使用される。工事現場、建設現場など何か大きな建物を造るような場面を思い浮かべることが多い。もちろん、体育・スポーツの分野では教育現場として、人づくりの場面でも使用される。

この現場というのは、実にリアルな世界であり、作業中に事故などがあると大変なことになる。したがって、どんな現場でも「安全第一」である。失敗から学ぶとはよく言うが、工

事現場で失敗すると命にかかわる。したがって、現場に入るにあたって周到な準備が必要となる。つまり、現場の安全を確保するために、あらかじめ設計をしたり、計画を立てたり、さまざまな予備実験を行ったりする。教育現場で言えば、学習指導要領であり、評価規準の作成であり、単元計画や授業計画を立案することや、競技成績を高めるためのさまざまな予備実験を行い、その知見を広める研究活動などが、こうした事前の準備に含まれるであろう。

工事現場では、有能な作業員が必要である。彼らの技能を磨くことは、非常に重要であると認識されているけれど、どうしても現場で腕を磨くしかない。つまり、作業そのものが作業員の経験を積み重ねることになり、そのさまざまなノウハウが作業員の身体に刻まれていくのである。

高度経済成長期に建設された巨大建造物が、その老朽化により取り壊されることになる。しかし、鉄球を当てたり、爆発させれば、粉塵が舞う。東京などの密集地では、クレーンが倒れるなどの被害も出ている。これに対し、ビルの屋上を蓋にしてしまい、ジャッキダウンでビルを解体する工法が注目されている。まだ、コスト面での課題があるようだが、新しい技術は、頭の中だけでは実現しない。考案者は、アイデアを練るだけでも、設計するだけでも、予算を獲得するだけでもなく、いつも現場に入り作業員とともに、新たな課題に向き合い続ける。「現場は宝の山である」とし、一人ひとりの作業員との何気ない会話から、新たな工法を模索する。

戦後まもなく技術論争が起こった。「技術は労働手段の体系である」とする労働手段体系説と「技術は人間実践（生産的実践）における客観的法則性の意識的適用である」とする武谷らが提唱する意識的適用説の対立である。特に高度経済成長期に突入する段階において、自然科学の成果が技術と直結し、技術者と技能者を区別する意識的適用説が隆盛を極めた。技能を水準の低いものとして軽視する傾向が強まったが、現在では、科学と同様、人々の技能が技術を支えているという認識で一致している。先のジャッキダウン工法の現場では、技術者と技能者という区別はない。ブルーカラー、ホワイトカラーという用語も死語になりつつある。

教育現場はどうであろうか？教職大学院が全国で設立され、現場経験のある実務者を必要とする。これに対して、大学人は研究者として現場に有益な情報を提供する。両者が「現場」の安全を確保しつつ、新しい人材を育成するために、一体となって進まなければ、被害は子どもたちにおよぶ。

PISA2015 では、21 世紀型スキルが求める問題解決と ICT 活用能力を評価するための試験が、コンピュータ上のエージェントを相手に行われるという。これまで評価することが困難とされてきた能力をパソコンに記憶されるログを分析して評価しようとする試みである。教育現場を改革するためのひとつの評価の試みである。

仮想世界は「現場」ではない。リアルな身体活動を伴う体育・スポーツの教育現場は、ますます重要となってくる。現場の先生も大学の研究者も、子どもたちの安全を守るために、しっかりと手を取り合う必要がある。少なくともかつて私が学んだウィリアムスの「体育原論」は、諸科学と現場をつなぐ領域であったと記憶している。体育・スポーツ現場に色濃く残る経験主義に対して、科学が必要であるし、その諸科学を結びつける哲学も必要である。時代は急激に進み、それぞれの分野ですばらしい発展を遂げている。そうした状況の中で、今、求められているのは、それぞれの立場や分野や領域の対立ではなく、現場に生きる子どもたちの安全を確保するための協働ではないかと考えている。

加藤 敏弘 (tosikato@mx.ibaraki.ac.jp)

## 書籍紹介

### 勝田茂監訳・石川旦訳（2014）『身体活動・体力と健康—活動的 生活スタイルの推進—』 朝倉書店.

石川 旦

原書は、*Claude Bouchard, Steven N. Blair, and William L. Haskell (Eds.) : PHYSICAL ACTIVITY AND HEALTH, Human Kinetics, Inc., 2007*で、3人の編著者の他に、北米、ヨーロッパおよびオーストラリアからの25名の新進気鋭の研究者たちによって共同執筆されたA4版400ページのテキストです。

本書は、身体活動科学、運動科学、体育学、公衆衛生学、健康増進、予防医学、および人間生物学を専攻し、身体的に活動的な生活スタイルに伴う健康上の利益および身体活動の可能な諸結果を学習する上級の学部生および大学院生を対象にして書かれています。

本拙訳者は、体育原理を専修してきましたが、その当初から、「体育」とその「原理」について、確固たる根拠をどこに置くべきかについて模索してきました。「体育の原理」を自然科学的研究に求めようとして、東京大学大学院教育学研究科に進学を希望しましたが、「今更方向を変えても、上手くいかないだろう」という示唆があり、断念しました。しかし東京オリンピック開催を前にして、周囲で行われている自然科学的な研究を目の当たりにする中で、そこで得られる知見の確からしさを肌で知りました。博士課程の途中で2年間UCLAに留学し、体育原理を模索する一つの方法として、比較体育研究の方法論を自ら構築しようとしていましたが、帰国後翌年の1968年に東京大学教養学部助手として赴任し、また1972年に『エアロビクス』を翻訳出版して以来、身体運動科学や予防医学の視点から、主として心臓血管系の疾患の発生諸要因と身体活動との関係について、教室にあるいくつかの専門誌の論文を、30年近くの在職中に次々と読み漁りました。

この間カナダでは、1966年のトロントにおける身体活動と心臓血管系の健康に関する国際会議の開催、1976年のモントリオール・オリンピック大会時に開催された身体活動と健康に関する国際会議、そして1988年と1992年の2回にわたる身体活動、体力および健康に関する国際コンセンサス会議の開催など、カナダ国内では関連する学会や組織団体において、身体活動と体力・健康に対する関心が非常に高まっていました。特にこの2つの国際的なコンセンサス会議の内容には非常に興味を引かれましたが、その会議報告書は余りにも膨大で、とても一人で翻訳できるようなものではありませんでした。

拙訳者としては、いつかこれら2つの内容がコンパクトな形で出版されることを願っていましたが、ようやく上述のいくつかの国際会議の組織運営の中心人物であった、当時ケベック州のラバル大学教授であったC. ブシャール博士の発案のもとに、エアロビクス研究所所長のS. N. プレア博士と疫学研究者のW. L. ハスケル博士の協力を得て、2007年に出版されたのでした。

早速原書を手に入して翻訳作業に入り、数回の推敲を経た後に出版社に持ち込んだのですが、編集部の方によって、訳文が生硬であり、また生理・医学的内容に関しては専門家のチェックが必要であるとの判断で、監訳者を依頼したり、書き直し等がなされたりして、出版までに3年ほど時間がかかりました。（すでに原著の第2版改訂版が2012年に出ています。）

筆者は我が国の学校体育の内容と指導の方法が根本的に改善されるべきであると考えています。その理由は、現実には多くの青少年、成人、および高齢者たちが、それぞれの日常生活の中で、自らの身体活動の必要性、適切な実施の仕方、そしてその環境諸条件等の整備について、それらの適切な理解および十分な動機付けがされていないということです。適切な

指導要領とその解説書の作成，および適切な教員の養成課程が構築される必要があると考えます。

本訳書は，特に身体活動の疫学の観点からその考え方と実践の歴史的な変遷を展望し，身体活動に関する現在の共通に理解された科学的知見を概説して，それらにもとづいて予防医学的視点のもとに，個人的および集団的にどのように日常的な身体活動を推進してゆくべきか，その方向を示唆しています。科学研究知見に関しては，未だ不十分な部分を指摘し，その解決の方向を示唆しています。人間の身体活動が，個人として望ましく成長発達し，その生涯を健全に生きるために，非常に重要な意味（意義）を持っていることは，現在の種々の学問的研究，一特に広い意味での人間の生物学・生命科学的研究一，の段階において，今や自明のことのようには思います。それ故，この身体活動（ムーブメント，アクティビティ，エクササイズ，プレイ，ゲーム，スポーツ，アスレティックス）の各種の形態の本質的特性を，自然科学的，心理学的，社会学的，および哲学的視点から究明し，それらの知見を総合的（統合的）に整理して，学校や地域社会における保健（予防）的および体育（スポーツ）的プログラムに反映させ，それらのための適切な指導者を養成して，現実の人々の生活の中でその効果を実現すべく，私達専門家集団は大いに努力する必要があるように思います。そのためには，私たちの専門分野における科学的知見及び理論的知見の総体的な共通理解を達成する必要があるように考えます。拙訳書の内容は，そのような努力の一つの成果を示すものである，と私は考えています。

最後に付記しておきたいことは，訳者として残念なことには，本体価格が当初想定した額より非常に高くなったことです。内容的には，出来るだけ多くの関係者の方々に是非とも読んでいただきたいと思っておりましたが，この点については誠に申し訳ないことです。

石川 旦 (ishikawa.noboru@khaki.plala.or.jp)

## 私の研究

### 「ボールゲームを学ぶとはどのようなことか」

土田 了輔（上越教育大学）

私が興味を持っている，あるいは避けて通れないテーマは「ボールゲームを学ぶとはどのようなことか」である。このテーマには，研究者としてというより，むしろ授業者として辿り着いた。私は，現勤務校の上越教育大学に運動学の助手として着任以来，22年間，ずっとボールゲームの実技授業を担当してきた。バスケットボールを授業で指導すると，「どう動いていいかわからない」という声を頻繁に耳にした。そんな時，私は決まって部活の指導でよく使う分解練習を使った。1対1や2対2，3対3，3対2など，レパトリリーはたくさんあり，楽しくできるように雰囲気づくりもして，動きの指導に取り組んだ。しかし，まさにその動きの指導をし，フルコートของเกมに移行した時，バレーボール経験のある学生から「バスケはどう動いていいかわからないから，苦手です」と暗い表情で告げられた。後頭部を殴られたような衝撃が走った。

複数人で何かをやり遂げようと連携する営みを，仮に共同体による実践と捉え，その中で連携が多少なりとも合理化し，分業が促進されてゆくなれば，その実践は常に他者との関係の産物として現れるわけで，関係を度外視して動きを動きとして指導するのはほとんど不可能である。単に「動け！」と怒鳴るのは愚の骨頂ということである。

古い社会学の教えるところでは，分業における人の行為は，何らかの役割期待に呼応する形で構成されるわけで，そもそも，自分が何を担う人かという役割（仕事）がわからない人

は、動きようもないはずである。逆に自身の仕事が完遂されるなら、「このように動かねばならぬ」という法もない。少なくとも私は、このようにボールゲームにおける動きを捉えなおすことにした。

チームという共同体において、個々のプレイヤーが担う役割は、厳密にいうと、プロスポーツや課外活動でいわれるところのポジションとは同じ必要がなく、チームが全体として意思をもった主体のように行為すればよい。相手のチームと呼応する形で、自分達と相手との関わりの様相、すなわちゲームを、主体的に操作しているという操作感を持つことが、何より重要な学びであると考え。したがって、集団としては、どのような熟練度のプレイヤーが織りなすゲームであっても、その様相を操作するのに必要な、なんらかの principle が学ばれねばならないし、個人としては、混沌として流動的なゲームの中の諸行為を解釈する参照枠が必要となろう。

欧米では 1980 年代から、理解のためのゲーム指導 (Teaching Games for Understand : 以下 TGFU) というムーブメントが盛んになり、我が国の体育にも影響を及ぼしているという。諸外国のそれはバスケットボールやサッカーなどの種目を教える中で、似たタイプのゲーム間では動きや戦術が転移するとされている。しかしながら、我が国では、「種目固有の技能ではなく、攻守の特徴 (類似性・異質性) や『型』に共通する動きや技能を系統的に身に付ける」(小学校学習指導要領解説体育編) ことが目指されている。似て非なる状況である。Spackman (1983) 以来、ボールゲーム遂行上の課題には On the ball と Off the ball という二つの枠組みがあるとされているが、「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付けるために、何を教えたらいいかという学習内容は、未だ開発の途上である。だから、私は、その仕事がしたい。

ボールゲームを系統的に指導するとはどのようなことか、本来は慎重な議論が必要なはずである。単純なものから全体的なもの (複雑なもの) へというシンプルすぎる法則を、時数が限られた授業に無批判に当てはめすぎるあまり、動きとゲームが乖離しはじめていると見ている。理解のためのゲーム指導とは、(個人にせよ集団にせよ) 学年進行にしたがって動きを複雑なものにするということなのだろうか。ゲームを徐々にシンプルにしたほうが、よほど奥深い指導ができると実感している。順序が逆なのではないか。

文献 : Spackman, Lynne (1983) Invasion Games: An Instructional Strategy, British Journal of Physical Education, 14(4), pp98-99.

土田 了輔 (tsuchida@juen.ac.jp)

**運営委員会より**

**釜崎 太 (明治大学)**

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

○専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

新しいメーリングリスト「Freeml」(<http://www.freeml.com/>) の運用を開始しております。メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。



す。速報性，経済性，専門領域活性化の観点から，是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。グループへ参加するには，事務局：釜崎 (kamasaki@meiji.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行され，全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。下記の URL にてコラムが公開されておりますのでご覧下さい。

<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>

釜崎 太 (kamasaki@meiji.ac.jp)

## 定例研究会のお知らせ

関根 正美(日本体育大学)

平成 26 年度第 3 回定例研究会 (大学院セッション) を 2015 年 3 月 7 日 (土) に下記の要領で開催いたします。なお，研究会終了後 18 時 30 分より懇親会を予定しております。会員の皆さま，ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2015 年 3 月 7 日 (土) 15 : 30～18 : 00 (予定) \*15:00 から入室可能です。
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン・9階309E教室

詳細は下記 URL をご参照下さい。

[http://www.meiji.ac.jp/koho/campus\\_guide/suruga/6t5h7p000001h0z0-img/720\\_campus\\_suruga.gif](http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/6t5h7p000001h0z0-img/720_campus_suruga.gif)

JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分

東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分

都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



## 発表内容（予定）

### 【発表①】神野周太郎（仙台大学大学院）体育の本質論とプラグマティズム思想の可能性ーデューイの教育学に基づいてー

「体育とは何か」という問いは、「体育」の本質的な意味を探究しようとする問いである。このことから、本研究の目的は、体育の本質論の構成のために、デューイ教育学の分析を通して、体育の教育的可能性について検討することである。

そこで、本研究の目的を達成するために、デューイの教育学著作を中心にしながら、デューイに関連した研究論文等も踏まえつつ、分析を行うこととした。

### 【発表②】尹熙喆（筑波大学大学院）

関根 正美 (msekine@nittai.ac.jp)

## 次号予告！

次号は本専門領域の新体制や研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当までお問い合わせ下さい。

### 体育哲学専門領域会報第18巻第4号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域  
久保正秋（会長）  
編集者 小林日出至郎（広報委員長）  
発行日 平成27年2月20日  
連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐2の町8050  
新潟大学教育学部 025-262-7075（直通）  
アドレス：hinode@ed.niigata-u.ac.jp

### 【編集後記】

関東の梅の話が聞かれる頃、越後平野では白鳥がシベリアへ向かって飛翔の時となる。幾つもの編隊が、コウコウと、甲高い声を交わし、白い翼で無窮の青空に舞い上がる。この時機にこの会報が発刊される。体育哲学専門領域の皆様のご高配ご尽力ご協力に、また、このような状況を授けてくれるお陰様に、心から感謝申し上げます。（K）